

魔法の種 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 藤原一秀

所属: 桃山学院大学

記録日: 2017年2月24日

キーワード: 学び方, 見通し, スケジュール

【対象学生の情報】

○学年 5 回生

○障害名 知的障がい

○障害と困難の内容

- ・日常生活や日常会話では、困難はあまり感じられないが、自発的な働きかけはせず、親しい関係の友人は少ない。そのため、学内では一人で行動していることが多い。
- ・会話も長い話になると、耳には入っているが理解はできなくなっていく。
- ・自分で調べて目的地に向かい、買い物などすることはできるが、授業については「わからないところがわからない」という状態。
- ・数学と理科が好きだと自分では話しているが、思考して解いたり、理解して覚えるというより、パターンや解答例を丸暗記して試験にのぞむことが多い。
- ・国語と英語が苦手。特に長文となると、文章が頭に残らない。
- ・高校1年生の時に療育手帳を取得。・自分のやるべき見通しが持ちにくい。
- ・困っていることに気付くことが難しく、周囲へ助けを求めることも自発的には難しい。
- ・常に「失敗するのではないか」「うまくいかないのではないか」という不安を持っている。

【活動目的】

○当初のねらい

- ・就労移行支援施設などで使われているチェックリストを活用し、これまでの「うまくできたこと」と「できなかったこと」を整理し、就労、自立に必要なスキルのうち、自分の得意、不得意なものを認識する。
- ・特にスケジュールや段取りが苦手なので、自分に適した情報の整理方法を身につける。
- ・それらを活用して卒業に必要な単位を揃え、就職活動を並行して行う。
- ・就職活動には、障害者就労の専門である移行支援事業所との連携を試みる。
- ・一般企業、障害者施設を問わず、受け入れ可能な場所で、実際に体験して就労のイメージをつかむ。

○実施期間 6月～2月（毎週月曜日の昼休み30分間、後期より毎週月曜、水曜の昼休みに変更）

○実施者 ①藤原一秀 ②大久保知香 ③今井大輔

○実施者と対象児の関係 ①社会福祉学科兼任講師 ②本校卒業生(共同研究者) ③本校大学院生(共同研究者)
ノートテイクや試験時間の延長、講義の録音・撮影、テキストの点字化など、障害のある学生のためのサポート体制は本学でも実施されているが、対象学生に適したサポートが困難な為、今回学部長の許可を得て独自にサポートチームを編成した。

【対象学生の目標の変化と現状】

○4月当初は「前期で卒業単位を揃えて9月卒業、その後半年かけて一般就職を目標」にしていた。

- ・4回生までに落とした単位のみ履修なので、余裕があると考えていた。

○9月卒業ができないと決まって、卒業することを重点にししながら、一般就職活動も行っていた。

- ・前期で半分合格したので、卒業も就職活動も半年間の余裕ができたにとらえた。

○12月に入って「卒業することに専念、就職活動は卒業後、福祉制度の利用も含めて1年かけてでも行う」ことにした。

- ・授業はひとつずつ確実にノートまとめや試験対策を行ったが、就職活動の余裕はなく、面接を受けてもうまくいかないため、卒業後に就職活動することを決めた。そして福祉のサポートを利用することも受け入れた。

○期末試験の結果は2月28日に発表。

【活動内容と対象学生の変化】

○対象学生事前の状況

- ・本校社会福祉学科への推薦入学。それまで社会福祉は考えたこともなかったが、推薦をきっかけに高齢者のことも考えるようになり、実習にも行ってみたいと思うようになった。
- ・友人関係はほとんどなく、ひとりでいることが多い。
- ・LINE でのやり取りは可能だが、待合せ場所なピンポイントの把握が難しい。
- ・会話をすると必ずメモを取り出し、単語を並べたてメモを取っている。
- ・1 回生～3 回生の時は自力で履修申請をし、授業や試験の情報を友人から入手することもなかった。
- ・2 回生で他の学生よりもたくさん単位を落としたので、高校で療育手帳を勧められたことを少し理解した。
- ・3 回生の時、初めて大学へ障害に対する「配慮願」を申請したが、「勉強の仕方がわからない」との内容だったので、ほとんど特別な配慮を受けていない。各教員への質問は積極的に行うことができている。
- ・26 単位不足で 5 回生になる。前期で卒業が目標。就職活動も並行して行うが、9 月から来春に向けて決まればよいというペースで全く焦りが感じられない。
- ・移行支援事業所の利用など、障害福祉に関わる制度の利用は拒否。
- ・各講義の試験範囲を自分で教員に質問して確認することができた。
けれども箇条書きにされた項目がほとんどで、その勉強方法についてポイントを把握していない
実際にノートや資料のどの部分が大切なのかは、共同研究者の大学院生からアドバイスを受けた。
- ・スマートフォンでことばや地図の検索、スケジュールの入力・確認の操作は簡単にできている。
できるだけ情報を共有して適時アドバイスをしようと Google カレンダーを共有したが、急に見つけたセミナーに参加したり、急に予定を入れたりして、約束の時間に来ないことが時々あった。
こちらの期待する「スケジュールを共有する」という意味は伝わっていない。

「ノートテイク」の取り組み

実践前の様子

- ・講義中のメモは資料に直接記入。ホワイトボードの文字をノートに写すということはあまりなかった。講義録音も行っていなかった。
- ・書いたことで安心してしまい、そこで終わってしまっていた。
- ・試験勉強の際に、情報を取り出して学習することができず、「どうしたらいいかわからない」状態のまま試験を受け、単位を落とすことを繰り返していた。

活動の具体的内容

- ・当初は、ONENOTE の利用を試みたが、紙ベースの資料とタブレット上の資料の両方を扱うことができず、紙ベースのみにした。
- ・教科ごとにノートを分けたり、追加情報があった場合、どこに書いていくと後から参照しやすいかなど、ノートのとり方についてレクチャーし、定期的と一緒に確認することで、どこに何が書かれているのかを把握できるようになった。

事後の変化

- ・自分からノートを開いて復習する姿が見られるようになってきた。
- ・チェックペンなどを使って、まとめたことを覚えようとすることもできるようになってきている。



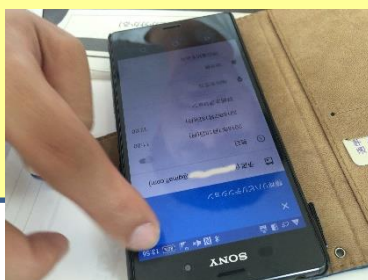
「予定の確認」の取り組み

実践前の様子

- 手元にある紙に、とりあえず聞いたことをメモしていたが、決まったノートでもなく、管理も不十分なため、メモ自体をどこにやったのかわからなくなることが多かった。
- 予定をなくしたことも忘れてしまっていることも多く、約束が守れないこともあった。
- 「約束しても忘れてしまうかもしれない」「また失敗するかもしれない」という不安を強くもっていた。

活動の具体的内容

- 本人と支援者で Google カレンダーを共有。
- これまでばらばらになっていた情報の一元管理ができるようになったため、自分でも確認できることが増えた。
- 共有できているため、支援者の側も、本人の動向が確認でき、必要な準備についての声掛けができた。



事後の変化

- 毎週月曜日昼休みの集合と決めているが、前日に確認の連絡が来るようになった。急な用件で待ち合わせができないときも、事前連絡が来るようになった。

文字を読むこと自体に問題がないため、音声読み上げも必要なく、周囲のノイズの影響もないので、NC ヘッドホンも使用していない。

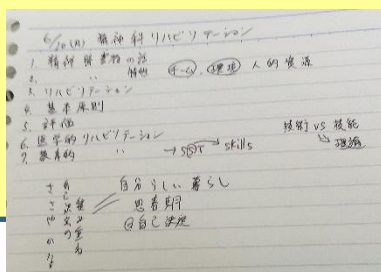
「支援の依頼」の取り組み

実践前の様子

- 自宅通学のため、生活上の課題については、保護者から求めなくても支援が受けられる状況。
- 学校での授業への参加や試験への取り組みといった課題に対しては、周囲との関わりもなく、自分から求めることもなかったため、支援は全く受けてこなかった。まじめに授業に出ているにもかかわらず、過度に単位を落とす状況が見られたため、そこで初めて学校も本人の課題を把握した。

活動の具体的内容

- Google カレンダーと LINE を使用して、本人と支援者がリアルタイムでつながれるようになった。
- 支援者と直接会う日を待たずに相談したり、アドバイスを受けたりできることで、「どうしよう」のまま課題が放置されることが減った。



事後の変化

- 就職面接が決まったら自分からカレンダーに入力し、その業界に関するアドバイス受けることができた。
- また、理解できない講義資料の写真を送信し、共同研究者の大学院生から説明を受けるなど、自発的に支援を求める姿が見られるようになってきた。

担当教員から直接聞いたテスト範囲。具体的に各項目が、ノートのどの部分に対応するかわかっていなかった。そのため大学院生とノートの見直しを行った。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

- ・解決への見通しが持てない中で、困っていることに対峙できない状況が続いていたのではないかと。
- ・彼からの申し出を待つのではなく、ネットを使ってリアルタイムでフォローができたことで、「こうすればよかったんだ」「ここは助けてもらえてよかった」という気づきにつながったのではないかと。

○エビデンス(具体的数値など)

- ・対象学生発信の質問や報告が増えてきている。予定を忘れることもなくなってきた。

○その他エピソード(画像などを含めて)

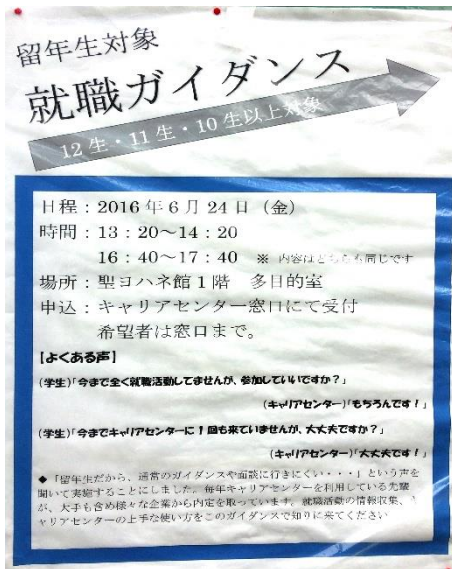
・就職活動

参加可能な就職セミナーのリストアップ。

日程が決まり次第、共有の Google カレンダーに入力。

移行支援事業による障害のある学生を対象とした就職セミナーなど紹介したが、一般就職のみを希望。

学内キャリアセンターが実施する就職セミナーに積極的に参加。



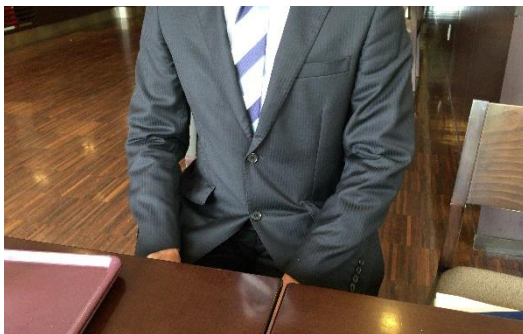
模擬面接で聞く質問

- ① 自己紹介をお願いします。
- ② 学生時代に最も頑張ったことは何ですか？
- ③ その経験から何を学びましたか？
- ④ 自己PRをお願いします。
- ⑤ 短所とその改善策について教えてください。
- ⑥ この業界を志望した理由を教えてください。

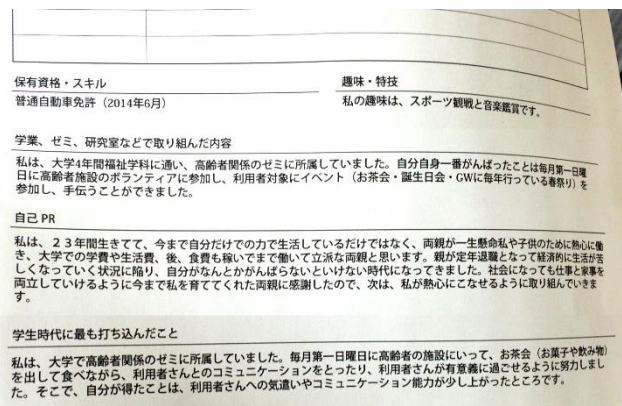
留年生対象就職ガイダンスのポスターと配布された資料の一部

セミナーとは別に「履歴書の書き方」「面接の仕方」などの本を自分で購入。

「この本、役に立ちますか？」と質問されたので、面接の本から実際にありそうな場面を抜き出し、学生食堂で面接練習を行った。そうしなければ全部本を読むだけで終わる可能性があった。



学生食堂での面接練習



高齢者施設を想定した PR シート

・福祉施設の就職面接では予想通り「なぜ5回生になったのか？」との質問を受け、「アルバイトに専念した」と答えてしまった。その時点で「落ちる」と感じた通り、その施設は落ちた。

・高齢者など福祉分野を志していると思っていたが、就職説明会で自動車業界に興味を持ったらしく、実際に中古車販売業者の面接を受けに行った。面接では「『業界第1位』ということばを使って、自己PRしなさい」との質問に全く答えることができなかった。

【今後の見通し】

○卒業に向けた、単位取得へのサポートを継続する

- ・整理したノートをどう活用して試験に臨むかについてのサポートを、継続して行う。
- ・わからない課題が出てきた時に、相談できる場（定期的な面接時とLINEによる共有）を活用できることを確認して、声をかけていく。

○卒業後支援方法

この1年の取り組みで一番定着したのは、Googleカレンダーの入力と、LINEのやり取りであった。
このまま卒業すれば直接会うこともないため、新たな手段を使うのは困難と考える。

卒業後、困難に直面してもそれが自分で解決できるレベルか判断できるか不安でもある。
本人の理解が得られれば、このままGoogleカレンダーの共有を継続。特に就職活動についてのスケジュールを入力してもらい、必要に応じてこちらからLINEを用いて内容の理解度や準備についての確認を行う。
また、こちらで入手した就職情報を発信し、情報不足や偏りを補う。

けれども大学教員として卒業後これ以上のサポートは困難と考える。
この先については就労支援センター等に引き継ぎ、継続的に支援を受けることが最良である。
そこで以下のこと引き継ぐことが重要と考える。

○魔法の種の取り組みで獲得したこと ～自信を持ってもらいたいこと～

・「ノートテーク」：

ノート(メモ)はバラバラの紙に記入して、順序などわからなくなるがあった。



配布資料やメモなども含め1冊のノートにまとめることができた。チャックペンなど使い、重要事項を絞り込み、確認できるようになった。

・「予定の確認」：

メモを書こうとはしていたが、ノートの隅や、紙きれであったため、忘れることがよく合った



スマホでのメール入力が可能であったので、Googleカレンダーに逐次予定を入力する習慣を身に着けた。支援者と共有することにより、早めに状況を把握できるので支援もスムーズになった。

・「支援の依頼」：

あまり周囲の支援を受けることはなかった。



授業での資料、就職セミナーなどのチラシなど内容が理解できない場合、その資料等を写真に撮って支援者に送ってアドバイスをもらえるようになった。

○これから自分で記録・確認するために ～Google Keepの活用～

予定や必要な情報をスマートフォンに入力する習慣は身に着いた

けれども今後社会に出たときには、自分で情報を分類し、優先順位を付け、行動していかなばならない。



Google Keep はひとつのメモに対して、タグ付け、色付け、リマインダー(アラーム)などの機能があるため、分類、重要度、備忘に役立ち、視覚的にも確認が容易である。

支援を依頼したければ、メモを支援者と共有することができるので、伝達手段に迷うことなく素早く相手に伝えることができる。

(入力例)



・就労支援センターなど利用した場合、次の支援者に伝えたいこと

進路については、ここまでは、本人の自己理解の弱さもあって、適切な就労の場の選択につながっていなかった。卒業単位取得と並行して就職活動も行ってきたが、試験を受けた会社は全て不採用になっており、本人も自分の働き方についてしっかり考えなくてはいけないという気持ちになってきている。また、様々なサポートを受ける中で、「単位取得と就活を並行していくことは自分には難しい」という理解が進み、就活については、卒業後に時間をかけて考えていきたいという希望にかわってきている。そこで、現在、支援者との情報共有により、自分の状況を把握しての支援の依頼ができるようになってきたこと。

ここまで、自分の得意なことや苦手なこと、どんなことに助けが必要でそれをどう求めていけばいいのかといった意識を持たずにきていたが、社会の中で合理的配慮を受けるためにも、自己理解につながるようなサポートが必要なこと。

これまで就労支援をする中で、「大卒」→「就職」→「転職」(繰り返し)→「ひきこもり」→「うつ病」→「通院」→「再就職」→「ひきこもり」→「入院」→「再就職」→「ひきこもり」...を繰り返す人をたくさん見てきた。就職やひきこもりの回数や期間に差があるにせよ、「自分に何が向いているか把握せず、サポートを受けることも知らない、または拒否し、そのまま社会人になった結果、適応できず孤立し、精神的に病んでしまうというパターンであり、対象学生については、いつでも誰かに相談できる環境を維持してもらいたい。